

花火

校長 稲葉 守朗

9年生にとって最後の公式大会である夏季選手権大会が、6月から7月にかけて行われました。足立区大会で優勝した野球部は、7月21日から始まる都大会に出場します。鍛え抜かれた地区代表のチームが出場する都大会ですが、関東大会出場を目指してがんばってほしいと思います。

さて、今年度も各部の試合会場に足を運びました。ブロック大会（足立区・荒川区・台東区・中央区）では、上位まで勝ち進んだ女子バレーボール部、サッカー部、バドミントン部の最終試合を見ることができました。あと一歩というところで、都大会出場の切符は逃してしまいましたが、それぞれ厳しい条件の中、最後までよくがんばれたと思います。生徒はもちろんのこと、入部以来共に練習に励んできた顧問の心情を思うと、かける言葉が見つかりませんでした。一般的に、公式大会の最終試合を終えると、9年生は引退となり、翌日からは、新人メンバーでのスタートとなります。私は、「部活動顧問には、卒業式が2回ある。」と思っています。大会の最終日は、第1回目の卒業式です。多くの時間を共に過ごした部員が去って行くことは、実に辛く悲しいものです。しかし、辛いと感じることは、生徒と出会ってからこれまでの期間を、本気で取り組めた証なのだと思います。

夏季選手権大会を観戦していて毎回感じるのですが、最後の最後まで、全力でプレーしている選手や顧問の姿が、なぜか夏の夜空に輝く「打ち上げ花火」と重なります。花火を作る花火師が顧問で、夜空に舞い上がり光り輝く大輪の花が生徒というところでしょうか。また、終わった後の静けさや寂しさが、同じものをイメージさせるのかもしれません。

私は、打ち上げ花火が大好きで、夏休みには、大きな花火大会に出かけていました。地元江戸川の花火や隅田川の花火も迫力満点でしたが、日本最大級の諏訪湖の花火は、その迫力に度肝を抜かれました。土浦の花火は、全国の花火師の技を競う選手権大会で、その1発にける花火師の思いが伝わり胸が熱くなりました。

花火の歴史について調べてみると、その歴史は非常に古く、紀元前3世紀頃の中国には、すでに花火の原型が生まれていたそうです。日本では、17世紀に徳川家康公が駿府城で鑑賞したのが最初だとも言われています。また、日本の真夏に花火を上げるようになったのは、お盆との関係もあり、「鎮魂」の意味があるからだとも言われています。隅田川花火の発端は、江戸時代に飢饉で亡くなった人々の鎮魂でした。東北地方では、東日本大震災で亡くなった人々の鎮魂と復興祈願のための花火大会を開催しています。花火には、それぞれ地元の方々の気持ちが重ねられています。

花火と部活動と重なるもの、それは、「仲間を思う気持ち」なのだと思います。夜空に打ち上げた花火のような9年生の姿を、後輩たちは間近でしっかり見てきました。その美しさやたくましさを、自身の未来の姿として受け止めています。後輩たちは、9年生の意志をしっかり引き継いでくれるはずです。9年生は、すでに「進路を決める」という次の目標に向かって歩み始めています。部活動で経験したことは、必ず将来の役に立ちます。夜空に勢いよく飛び立つ花火のように、目標に向かって突き進み、大輪の花を咲かせてください。そして、3月には、個性豊かで色とりどりのスターマイン（連続花火）で、興本扇学園を飾りましょう。